

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

わたしとロダーリ⑤

ロダーリのオルタ湖を訪ねて

竹田 理乃

ある日、すつと冷え込んで秋になる。私がロダーリの故郷に足を運んだのは、そんな風情の一日のことでした。青々とした森に覆われた山々と遮るもののない湖水の上を、風がのんびりと吹き渡る、スイスとの国境も遠くない北イタリアの田舎のことなので、こういうものなのかと旅情を感じたりもしましたが、小さな駅のバリスタさんも「昨日までは夏だったのにね」と首を傾げていたので、やっぱりあの日の冷え込みは、多少なりとも珍しいものだったのではないのでしょうか。

イタリアを代表する児童文学作家のひとり、ジャンニ・ロダーリの故郷はミラノの北にあります。ミラノの北といえば、宮殿と庭園に覆われたイーゾラ・ベッラ (Isola Bella 美しい島) のあるマッジョーレ湖や、映画「スター・ウォーズ エピソード2 / クローンの攻撃」のロマンチックな名シーンのロケ地に選ばれたヴィッラ (villa 別荘) があるコモ湖など、もっと有名な湖はいろいろありますが、幼いロダーリが眺めて育ったのは、それらの湖の西に位置するオルタ湖です。決して小さいわけではありませんが、お隣がイタリアで二番目の大きさを誇るマッジョーレ湖なので、地図で見ると水たまりみたいに愛らしいような気がしてきます。気が向けば、ぜひ「オルタ・サンジュリオ」と検索してみてください。華やかなヴィッラが妍を競う大きな湖たちに比べれば、かなり質素なオルタ湖ですが、写真からでもその密やかな魅力は伝わってくるはずです。

明るく朗らかな国民性が売りのイタリアの街を

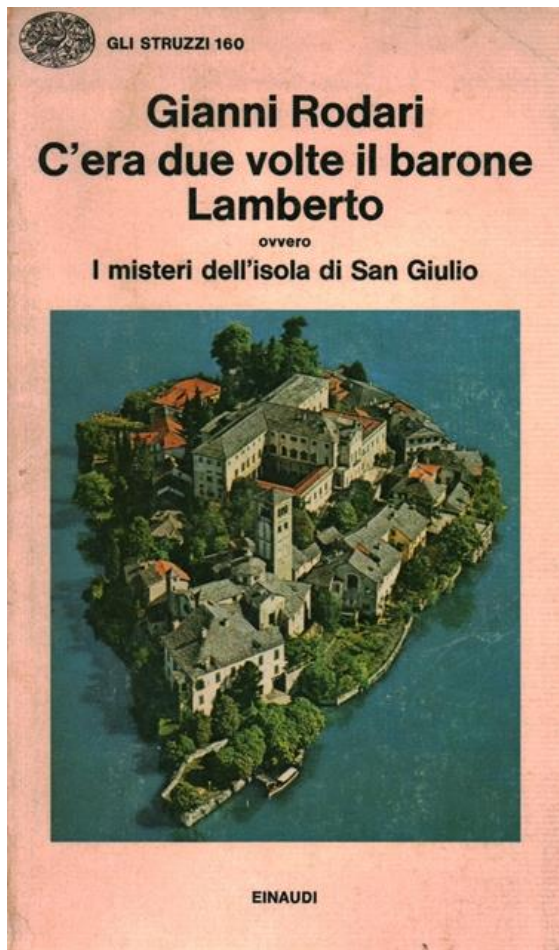
捉まえて、どうして「密やかさ」というキーワードでご紹介したくなったのかと言いますと、それはオルタ湖の中心に浮かぶイーゾラ・ディ・サン・ジュリオ (Isola di San Giulio 聖ジュリオの島) があるからです。湖畔の街オルタ・サンジュリオから船の出ているこの島は、聖ジュリオ教会を見てしまえば、あとは一本道をぐるりと歩くだけのささやかな名所です。観光地としてはあっけないのですが、建物の隙間から鈍く光る湖面を垣間見たり、船着き場でぼんやりしながら、誰もがなんとなく声を潜めて話している声を聴いたりするのは、肺の奥までゆったり呼吸できるような気持ちのいい体験でした。



【サンジュリオ島の船着き場】

私がオルタ湖を訪ねたのは、真夏の観光シーズンがとっくに終わったあとだったので、余計にひっそりしていたのかも知りませんが、トルナトーレ

監督も映画「ある天文学者の恋文（原題：CORRESPONDENCE）」で密やかなサンジュリオ島を描いているので、やはりそういう魅力があるのでしょう。この映画はほとんどが英語で撮られていて、イタリア語が使われているシーンは少ないのですが、北イタリアの渋さが美しく、またミステリー仕立ての失恋映画として面白かったので、寒い日に温かくして観る映画としてオススメしたいと思います。



【サンジュリオ島の描かれた『二度生きたランベルト』表紙】

出典元：<https://www.dimanoimano.it/en/cp145851/narrativa/>

narrativa-italiana/c-era-due-volte-il-barone

そんなサンジュリオ島を見下ろすホテルにチェックインしたのは、あっという間に急降下していく太陽と気温、冷たい風といっしょに窓から吹き込む、金木犀のような花の香りが印象的な、光の薄い日暮れでした。案内してくださったホテルの方が、眺めが一番いい部屋を用意しましたと自慢す

る通り、斜陽に染まって文字通りのバラ色に光る、雪のモンテローザが遠くに見えていて、どんなに寒くても、空が暗くなるまでは、窓を閉める気になれませんでした。真冬になったら着ようとミラノで買っておいたセーターを、トランクの底から引っ張り出したときの心細さは、あの湖の雰囲気にしっくりきていたと思います。翌日にはいよいよロダーリの家があるオマーニャの街に入るというのに、風邪を引いてしまいそうでした。

私が宿泊したのは、湖畔の観光地オルタ・サンジュリオではなく、その東側にある山の斜面に建つホテルでした。山道の途中にぽつんとある観光ホテルは、普段ならば避けるような条件だったのですが、この旅行では目的地のひとつも同然でした。ロダーリの長編小説『二度生きたランベルト』に登場する記者たちが、そんなホテルに泊まっていたからです。世界中に銀行を持ち、忠実な執事にかしずかれ、高額な療養方法で、無数の病気を退けながら生きながらえている御年 92 歳の大富豪ランベルトが暮らすサンジュリオ島の豪邸に、居直り強盗が人質を取って立てこもっているというニュースを聞きつけ、世界中からやって来た記者団が、オルタ湖を囲む山々に陣取って取材を試みるというシーンが好きで、数時間もあれば観光できる街を見下ろす場所に、無理に一泊してみたわけです。

作中では日本人も含む記者たちが、お祭り騒ぎで右往左往するのですが、私はひとりぼっちだったので、夜は静かなものでした。なにせ、団体客も受け入れられそうなホテルに、泊り客は私ひとりだけ。出入りに困らないようにと、通用口のカギを渡されたり、わざわざレストランを開けてもらったり、なにかと気が引けましたが、まわりは森なので、開き直るしかありません。湖に面して大きなガラス窓の連なる、広々としたレストランにぽつんと座って、キャンドルの明かりで食べたのは、近くで獲れたという巨大な魚のフライでした。それにたっぷりレモンを絞っていると、なんだか中原中也の童話「夜汽車の食堂」に迷い込んだみたいで、ロダーリを探しに来て、日本の古い友だちに再会したような照れくささを感じました。思いがけないことが頭を過ぎるのも、ひとり旅の面白さなのかも知れません。

ロダリーは『ファンタジーの文法』で「物語は《ファンタジーの二項式》によってのみ誕生しうる」と断言していましたが、夜のオルタ湖と日本の詩人を並べたら、どんなことが起きるのか気になってしまいます。物語の種になる《ファンタジーの二項式》に使うにはくふたつのことばの間には、ある程度の距離が必要である。一方のことばが他とまるで関係のないこと、およびその接近がかなり異常であることが必要であるのだとか。この場合、並べたことばの接点は、私の個人的な読書と旅行の経験だけなので、赤ずきんちゃんをヘリコプターに乗せたり、シンデレラを金星共和国の舞踏会に連れ出したりする、ロダリー流でお話を作るには、そう悪くない組み合わせなのではないでしょうか。

読みながら笑いを堪えていると、顔の筋肉が疲れてしまうほどにコミカルな『二度生きたランベルト』ですが、このお話を書いたとき、老年に至ったロダリーは、体調を崩しがちになっていました。作品のタイトルからも分かる通り、ランベルトは死に直面します。作者の加齢による心身の不調が反映されているのでしょうか。いくら愉快地に語られていても、自身を蝕む病氣の名前をリストアップして数え上げる老ランベルトの憂鬱な様子には、井戸の底を覗き込むのに近い、暗い魅力が感じられました。主な活躍の場だったミラノやローマなどの大都会でもなく、お得意のおとぎの国でもなく、命の限界を意識したロダリーが、こんなに重苦しいテーマを取り扱うにあたって、その舞台に故郷を選んだのだと知ったとき、私はすぐにオルタ湖を見に行こうと心に決めました。

作中のサンジュリオ島は、贅を尽くした豪邸そのものですし、奇想天外なキャラクター達が集結する場所ですので、彩り豊かで活気に満ちた描かれ方をしています。ところが実際に行ってみると、受けた印象はほとんど真逆です。驚くことはありませんでした。むしろ納得がいきました。オルタ湖畔で知り合った方々は、口をそろえて「若い人の喜ぶようなものなんて、なにもないでしょう」と言っていたのですが、私にはそこが新鮮でした。なにもない空間があるということが貴重でした。

たとえば身近な水辺でぼかんとしようと試みて

も、鴨川に出かければ対岸に居並ぶカップルの観察を始めてしまいます。それに対して、オルタ湖を前にしているときの私は、今までインプットしてきた情報を、ゆったりとした空間に向かって、なにげなくアウトプットし始めていました。そうでなければ、ずっと昔に読んだきり忘れていた童話なんて、いきなり思い出したりできません。

鄙びた魅力のある街も、美味しかった料理も、親切だった人たちも、なかなか見ることのできない美術品や建築物も、あの旅行でめぐり合ったものは、どれもが期待以上でした。そのなかでも、自由で突飛なイメージの飛躍を愛したロダリーが、物語創作の最初のキャンパスにしたかも知れない、湖の上の大空間を体感できたことは、なによりも価値があったように思われます。



【オルタ湖とサンジュリオ島】

[参考文献]

『二度生きたランベルト』(ジャンニ・ロダリー著、白崎容子訳、平凡社、2001)

『ファンタジーの文法』(ジャンニ・ロダリー著、窪田富男訳、筑摩書房、1990)

『新編中原中也全集 第四巻』(中原中也著、角川書店、2003)

(当館語学講師)

自転車レースと南北問題

谷口 和久

初のイタリア旅行で降り立ったのは夜のフィウミチーノ空港だったため、陽光の下で初めて目にしたイタリアは、ローマからナポリへ向かう車窓の風景だった。

列車はコンパートメント式で雰囲気があったが、車窓から眺める景色は南に行くにつれ荒れて殺伐としたものへと変わっていった。赤茶けた山肌に、木々はまばらで、あったとしても枯れ木と見まがうような灌木ばかり。緑や水など、景色にうるおいを与える要素はほとんど見当たらない。

到着したナポリでは、ハエのように群がるタクシーの客引きに、信号などまったく目に入っていないかのような車の洪水。きわめつけは、駅前のジェラート屋のガラスケースに弾痕とおぼしき穴が……。よかったら一泊していこうかと思っていたナポリだったが、迷うことなくトンボ返りした。

初イタリアの実質1日目の体験が強烈だったこともあり、以降ナポリをはじめとした南イタリアの印象は正直あまり良くない。イタリア人たちに言わせると「ナポリは特別」ということだが、それまで自転車レースの映像を見て馴染んでいたイタリアの風景は北部のものが中心で、南イタリアの風景にはどうも違和感がぬぐえなかった。

いきなり南イタリアに対して失礼な物言いをしてしまったが、私のように偏屈な北イタリア派(注:「北イタリア派=偏屈」というわけではないので、念のため)は少数派で、むしろ周りの人たちの旅先としては南イタリアの方が圧倒的に人気のようだ。

古くから定番のシチリアやカプリはもちろんのこと、近年はプーリアや邦画の舞台にもなったアマルフィも大人気だ。南イタリアの方が、私たち日本人のイメージする「イタリア」の要素を多分に含んでいるためだろう。

ただ、イタリア来訪者全体で見ると、圧倒的に多いのは北イタリア、中でもヴェネト州がもっとも人を集めている。その背景としてはイタリア最大の観光都市ヴェネツィアを抱えていることがまず一番の要因。それに加えて、イタリアにやって来る外国人でもっとも多いのがドイツ人であり、ドイツから足を運びやすいエリアであることも数字を押し上げている要因だ。他にアルト・アディジェやフリウリもドイツから近いが、アルプスの山間部で南方感があまり感じられないのかもしれない。

ヴェネト州にあるガルダ湖周辺はオリーブも栽培されるほど、緯度のわりに温暖な気候に恵まっている。ゲーテが「君よ知るや南の国」と謳った南の国とは、アフリカでもタチヒでもなく、イタリアである。アルプスの向こう側の陽光は、ドイツ人にとって魅力に満ち溢れたものなのだろう。アルト・アディジェは駆け足で通り過ぎたゲーテも、ガルダ湖ではのんびり腰を落ち着けて滞在を楽しんでいる。

先に、自転車レースの映像で慣れ親しんだのは北イタリアの風景と書いたが、そもそも自転車産業の中心が北イタリアであり、レースも北部が中心で、ジロ・ディ・イタリアでも南部(※カンパーニャ以南)までやってくるのは大会が始まって15年もたってからのことである。

自転車の主だった工房、古くはビアンキやレニャーノ、それに戦後の全盛期を支えたデローザやコルナゴなど、いずれもミラノ周辺が拠点である。また、自転車の基幹パーツを製造するカンパニョーロ社はヴェネト州ヴィチエンツァのメーカーだ。

自転車選手の出身地も北イタリアが圧倒的に多い。これまで百年以上にわたるイタリア人選手すべての出身地を調べるのは非現実的なので、ジロ・ディ・イタリアで優勝した歴代のイタリア人にしぼって見てみよう。

101回の大会中、イタリア人優勝者は42人。州別にかざると、トップはロンバルディアの16人、次がピエモンテの8人。それにヴェネトやトレンティーノ・アルト・アディジェを加えて、70%が北イタリア出身者で占められている。かたや南イタリアは、2013年にシチリア出身のヴァンチエンツォ・ニ

バリが優勝するまでゼロであり、2019 年現在でもニバリただ一人である。

南イタリアにおける自転車事情について書かれたものはきわめて少ないが、作家カルロ・レーヴィの代表作「キリストはエボリに止りぬ Cristo si è fermato a Eboli」の中に、自転車選手を目指す若者が登場する。

この作品は、第二次大戦前、反ファシズム活動のため政治犯として捕えられ、南イタリアのバジリカータに流罪となった日々を描いたもので、南イタリアにおける農村問題を広く世に知らしめた。



【カルロ・レーヴィ】

出典元: https://it.wikipedia.org/wiki/Carlo_Levi

タイトルにあるエボリとは、カンパーニャ州サレルノの南東にあるコムーネ(自治体)である。キリストはエボリで歩みを止めてしまった、すなわち、それより南はキリストの威光のおよばぬ未開の地ということである。

エボリより南に位置する流刑地バジリカータをレーヴィはこう語る。「国家や都会の神々も、狼や昔の黒猪が依然のさばっているこの白粘の土地では、少しの尊敬も払われていない。」

農家を訪れると、部屋の中に飾られているのはマリア像でもムツソリーニの写真でもなく、ニューヨークの写真やルーズベルトの肖像。いくら耕しても収穫の増えることのない不毛の地で、貧困とマリアにおびえながら日々過ごす南部の農民たちにとって、ローマの政府もバチカンも、彼らを搾取する対象でしかない。農民たちにとって、希望の地と呼べるのはアメリカなのである。しかしながら、渡米者の大半は夢やぶれて再び不毛の地に戻ってくるのだが……。

そんな土地に暮らす幾多の登場人物の中にあつて、自転車選手を夢みる若者は、自転車競技の本場である北イタリアを目指している。

グラッサーノにカルメロ・コイロという二十歳あまりの若い頑強な土方がいた。野良仕事や道路修理の日傭人夫をしていたが、彼の願いは競輪選手になることであつた。ビンダとゲルラのことを読んでからというものはずますます病みつきになり、ひまさえあれば、がたがたの古自転車を走らせ、日曜日にはいつもグラッサーノ近辺の坂道を夢中で乗り廻していた。時には汗と埃だらけになりながらマテーラやポテンツァまで走り続けることもあつた。体力も持久力も呼吸も申し分なかったから、何とかして自転車で北伊まで行って競輪選手になりたいと考えていた。もし君がその気にさえなるなら、ぼくの友人でアルフレード・ビンダの伝記作者であるスポーツ記者を紹介してあげよう、と私がいうと、カルメロはすっかり喜んで、ブリスコの食堂で私の顔をみるなり彼の顔は希望に輝いた。

(清水三郎治訳『キリストはエボリに止りぬ』より)

希望に輝いたカルメロ君だが、その後のストーリーで彼が北伊まで行って競輪選手になった様子はなく、あいかわらず道路工事に明け暮れる日々であつた。もし彼の生まれが北部であれば、たとえ貧しくとも、ほぼ毎週のように開かれている手近な草レースにでも出て、プロへの道が通じる可能性もあつただろうが、バジリカータでは、いくら坂道を乗り廻していても、道は閉ざされたままなのである。

“Campionissimo” ファウスト・コッピもそうだが、古くはツール・ド・フランスを連覇したオッタヴィオ・ボットェッキア(ヴェネト出身)や女性で初めてジロを走ったアルフォンシーナ・ストラータ(モデナ出身)など、自転車選手には貧しい生まれの人も多い。みなオンボロの自転車を使い廻してチャンスをつかんでいった。ただ、チャンスをつかめたのは、もちろん本人の才能や努力のたまものだが、環境によるところも大きい。

自転車競技に対する理解やリスペクト、切磋琢磨する仲間、引き立ててくれる指導者や後援者。本人の熱意や才能だけではいかんともしがたい塀にはばまれて、いつしか輝きを失ってしまった希望も多々あったことだろう。

話の中には多くの個性的な人物が現れるが、若く夢あふれた様で描かれているのはカルメロ君ただ一人である。あとは腐敗しきった中産階級か、絶望に満ちた農民たちだ。希望に満ちた青年も、いつしか南部の閉塞感の中で摩耗していく。

レーヴィが問題提起して 70 余年が過ぎた現代においても、南イタリア諸州の若年層の失業率は 50%前後である。科学技術や社会が進歩しても、構造的問題はまだ深く根を張り続けている。



【イタリアの若年層失業状況 (2011 年)】

(シチリア、サルデーニャ、カラブリア、カンパニアは 44-55%)

出典元: <https://www.istat.it/it/>



【カルメロ君が憧れたレアルコ・グエッラ】

出典元: https://it.wikipedia.org/wiki/Learco_Guerra

[参考文献]

Daniele Marchesini, *L'Italia del Giro d'Italia*, il Mulino, 2009
William Fotheringham, *A Century of Cycling*, Motorbooks Intl, 2003

『キリストはエボリに止りぬ』(カルロ・レーヴィ著, 清水三郎治訳, 岩波書店, 1953)

『イタリアの自転車工房』(砂田弓弦著, アテネ書房, 1994)

『イタリア紀行』(ゲーテ著, 相良守峯訳, 岩波書店, 1986)

wikipedia 関連情報

(当館スタッフ)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>